



役にたかないもの、
美しいと思わないものを、
家に置いてはならない。

HAVE NOTHING IN YOUR HOUSES
THAT YOU DO NOT KNOW TO BE
USEFUL OR BELIEVE TO BE BEAUTIFUL.

ウィリアム・モリス
WILLIAM MORRIS

ようこそ「アーツ&クラフツ」の世界へ

「アーツ&クラフツ」をご存じですか。19世紀後半のイギリスで興り、今日の暮らしに大きな影響を与えたデザイン運動です。アーツ&クラフツが目指したものは実に多彩です。産業化・工業化が進む時代を背景に、失われた手仕事の良さを見直し、自然や伝統に美を再発見します。さらには過剰な装飾ではなく、シンプルな美しさを生活に採り入れるライフスタイルをいち早く提案しました。



上: D.G.ロッセティ「聖ゲオルグとスズバネの王子」1862年頃
下左: C.F.A.ヴォージー「薔薇時計」1895-96年
下右: アレクサンダー・フィッシャー「舞台:孔雀」1899年頃(いずれもV&A蔵)

主導的な立場にあったのは、思想家ジョン・ラスキン(1819-1900)と、デザイナーで思想家、詩人でもあったウィリアム・モリス(1834-96)でした。ラファエル前派のロッセティやバーン＝ジョーンズらが参加したモリス・マーシャル・フォークナー商会(のちにモリス商会)を中心に、装飾芸術をめぐって活発な活動がロンドンで繰り広げられました。1880年代末には、アーツ&クラフツ展覧会が創設され、各地で意欲的な展覧会が開かれたり、工房が作られたりしました。アーツ&クラフツの考えと試みは、出版や調査を通じて、瞬時にヨーロッパやアメリカ、日本にも伝わりました。各地での歴史、文化、社会情勢の影響を受けながら、多様な作品が生み出されていきます。住宅を中心とする総合芸術の探究は、その後のモダン・デザインを生む源流の一つとなりました。

本展は、装飾芸術の殿堂、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館(V&A)との共同企画です。アーツ&クラフツの精神の広がりを、イギリス、ヨーロッパ、日本で作られた美しい作例を通じて概観する、またない機会です。V&Aと日本国内の美術館などから、家具、テーブルウェア、ファブリック、服飾、書籍やグラフィック・デザインなど約280点を一堂に出品する見応え満点の内容です。

ウィリアム・モリス、ウィーン工房、民芸まで 約280点、一挙展示

第1部はアーツ&クラフツのルーツ、イギリスが舞台。モリスの壁紙、ロッセティのステンドグラスなど、V&Aが所蔵する名品のほか、マッキントッシュやヴォイジー、アッシュビーら、都市や田園で活動した作家の多彩な作品約110点を紹介。モリスが晩年まで使用したケルムスコット・マナーの一部を再現し、生活空間の一例として展示します。第2部は、オーストリア、ドイツなどでの展開を、約50点で構成。イギリスのギルドを参考に創設した「ウィーン工房」を中心に、ヨーゼフ・ホフマンやコロマン・モーザーらが、当時の最先端都市ウィーンならではの洗練されたアヴァンギャルドなデザインを生み出します。ドイツの



「ダルムシュタット芸術家村」での試みや、民族のアイデンティティを結集させた北欧やロシアの動きにも注目します。第3部の日本は約120点。民芸運動を日本でのアーツ&クラフツと位置づけ、柳宗悦が生み出した民芸の考えを、取集品を通じて紹介。さらには、柳を中心に昭和初期に建てられた「三田荘」の一部を再現展示。柳らが集めた各地の取集品に加え、若き黒田辰秋、濱田庄司、河井寛次郎ら作の調度品で飾られた室内は、民芸の原点ともいえます。そのほか初期の民芸を代表する富木憲吉、濱田、河井、黒田、バーナード・リーチ、芹沢銈介、棟方志功の作品群も紹介します。



再現展示される「三田荘」の応接室(写真提供:アサヒビル大塚山荘美術館)

上:コロマン・モーザー「ベッドとベッドサイドテーブル」1904年頃
下左:ヨーゼフ・ホフマン「椅子」1904年(以上2点は本館市立近代美術館建設準備室蔵)
下右:おそろくダゴベルト・ペッツ「花瓶」1910年頃(V&A蔵)



ウィリアム・モリス「西風東漸」1888年(V&A蔵)

ヴィクトリア&アルバート美術館と ウィリアム・モリス



V&Aは、1851年に開かれたロンドン万国博覧会の成功をうけ、1852年、産業博物館として創立されました。1857年に現在のサウス・ケンジントンに移転し、サウス・ケンジントン博物館と名を改め、1899年には、創立に尽力したヴィクトリア女王とアルバート公夫妻の名を冠して改称しました。古代から現代までの絵画、彫刻、陶磁器、織物、家具、写真、ファッション、ガラス、宝石など、世界に類を見ない豊富なコレクションを誇っています。V&Aには、ウィリアム・モリス



写真提供:大塚芸術大学図書館

らが1861年に設立したモリス・マーシャル・フォークナー商会が内装を手掛けた食堂「グリーン・ダイニングルーム」が現存しています。世界最初的美術館内食堂の一つで、フィリップ・ウェップの監督の下、バーン＝ジョーンズがパネルを、モリスが天井の模様を担当。度重なる修復を経て、現在も当時の姿を見ることができます。本展には、同ルームのデザインも展示されます。

「生活と芸術—アーツ&クラフツ展」

ウィリアム・モリスから民芸まで

LIFE AND ART: ARTS & CRAFTS FROM MORRIS TO MINGEI



2008年9月13日(土)~11月9日(日) 京都国立近代美術館

主催:京都国立近代美術館、朝日新聞社 協賛:大日本印刷、大塚芸術大学

2009年1月24日(土)~4月5日(日) 東京都美術館

主催:東京都美術館、朝日新聞社 協賛:大日本印刷

2009年6月5日(金)~8月16日(日) 愛知県美術館(予定)

主催:愛知県美術館、朝日新聞社 協賛:大日本印刷

企画:ヴィクトリア&アルバート美術館 後援:ブリティッシュ・カウンシル、外務省、文化庁 協力:日本航空

京都展8月13日前売り販売開始予定

公式HP: <http://www.asahi.com/ac/> (7月1日オープン予定)



特に記載のない写真はAll Images ©V&A Images/Victoria and Albert Museum

わたしが楽しむ
「生活と芸術」運動、
はじまりはじまり。

L I F E

できることなら日々を大切に、心地よく暮らしたい。

でも、じぶんの暮らしが「芸術」になるなんて、それはちょっと。

と、ふつうに考えるすべてのひとへ。

きっとそういう気持ちも、生活の芸術家の種となるのだと思います。

100年とすこし前のイギリスで生まれた、「アーツ&クラフツ」の精神は、

欧米や日本に姿かたちを変えながら浸透し、

時を経てなお深く新鮮に、今日の生活に根ざしています。

それは教科書のような概念ではなく、よいモノを見る眼として、

生活についての思想として、生き方として、いつも生きていく精神です。

そもそも芸術という解釈に少しだけズレがあるのだからしたら、

「いつもよいモノ、よいことについて、民間自衛をくりかえすこと」を

芸術だと考えてみたらどうでしょう。

いつも買物のたびに再現される、あの迷えるまも、もしかしらば芸術なのでは。

このキャンペーンは、モノや情報があふれかえる今を生きるわたしたちが、

毎日をよりよく生きるための運動として、現代社会におけるリアルな

「アーツ&クラフツ」を発信してゆかれます。

各界のオピニオン・リーダーや様々な分野の方々が考える、

それぞれの「アーツ&クラフツ」なスタイルをご紹介します、

「生活と芸術」が楽しく身近に感じられるコンテンツがあります。

さあ、ごいっしょに。あなたが楽しむ「生活と芸術」運動、はじまりです。

<http://www.asahi.com/la/>
(8月1日オープン予定)

